国語科　授業づくり講座　No.３

【教材研究会】９月 27 日　土佐市立蓮池小学校

発行
令和元年１０月２５日
中部教育事務所

今後の予定
１１月８日（金）
13:45～16：30
授業研究会

授業者　上田　さなえ教諭

単　元　２年Ａ組の『ふたりはOO』の絵本をつくろう
「お手紙」（光村図書二下）

単元計画　（全１０時間）

第１次　学習計画を立てる
第２次　がまくん、かえるくんらしさをつかむために教科書を読み、お話ポケットに「お話のタネ」をためていく。
「ふたりはともだち」シリーズから、がまくん、かえるくんらしさを見つける。
第３次　がまくん、かえるくんのお話を書く。

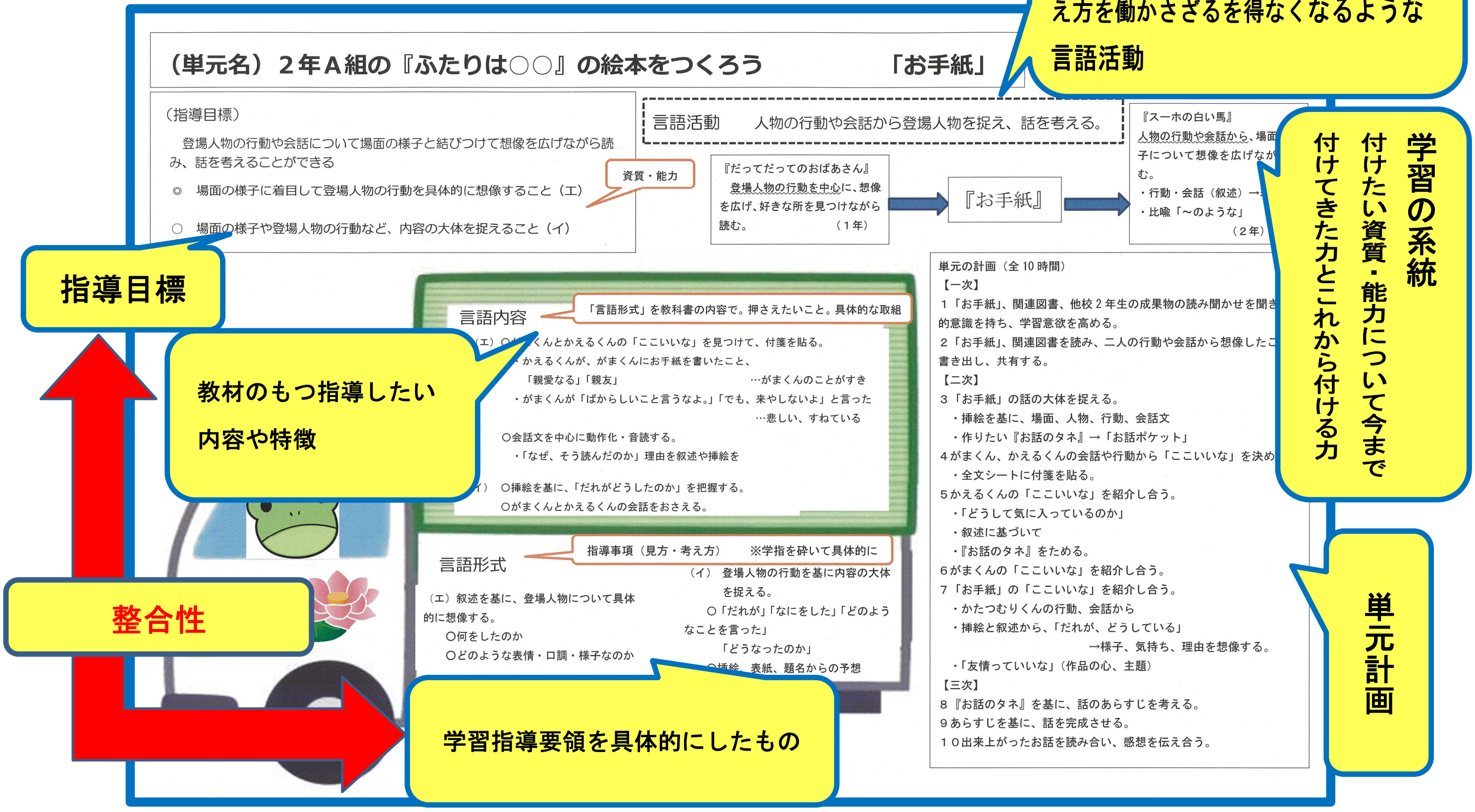
言語活動　がまくんとかえるくんの行動や会話から、二人の性格を捉え、筆者の書きぶりに似せた物語を考える。

〈C読むこと　言語活動例イ〉　物語や絵本を読んだことをもとに、想像をふくらませる。

育成したい資質・能力

・場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像して読む。
・文章の中における、主語と述語の関係に気づき、主語と述語を適切に対応させて使う。
・場面の様子や登場人物の行動などの内容の大体を捉え、二人の行動などを中心に想像を広げ、進んで話を考えようとする。

提案授業のポイント1　蓮池小学校版「単元構想図」の作成



トラック図を用いた「蓮池小学校オリジナル単元構想図」の提案があった。（上図）Ａ３サイズ１枚に、この単元で付けたい力、系統性、指導事項、言語活動、単元計画が明記されている。これを書くことにより、「教材を教える」から、新学習指導要領の趣旨に沿った、「教材で付けたい力を育成する」学習への転換となり、そのために何が必要なのかが可視化できる。

次回にむけて

従来の学習指導案に加えてこの単元構想図を作成するのではなく、この内容とともに本時の活動や見方・考え方を働かせた児童の姿を追記して、Ａ３サイズ２枚で学習指導案を作成する。働かせたい見方・考え方が明確でないと、深い学びに子どもたちを導くことができない。本単元でどの言葉に着目して、どのように考え読んでいくのかということを教師自身が明確にもち、意図的計画的に単元を構想していく必要がある。また何に着目しどのように考えていくとよいかということを子どもたち自身が分かると、汎用的な力が身につき、主体的に学習に取り組むことができる。そのために、どのような見方・考え方を働かせた子どもの姿を期待するのか、具体的にイメージすることが大切である。

提案授業のポイント2

話を書くために、「読むこと」の精査・解釈をおこなう

「お手紙」は、文学的な文章で、「読むこと」が指導事項である。蓮池小学校は、「人物の行動や会話から登場人物を捉え、話を創作する」という言語活動を通して精査・解釈していく単元を提案した。がまくんとかえるくんのキャラクターを生かした話を書くために、教材文や関連図書から読み取っていくことを主として展開する。

子どもたちは、がまくんとかえるくんらしさがつまった「二人は〇〇」シリーズのお話を作るために、教科書教材「お手紙」や、アーノルド＝ローベルの「ふたりはともだち」などの関連図書を読み、叙述を根拠にしてがまくんとかえるくんらしさを読み取っていく。場面の様子に着目して、二人の行動や会話について、何をしたのか、なぜしたのかを具体的に思い描きながら、豊かに想像していく。それらを友だちと共有することで、自分の考えを広げたり深めたりしていくのである。

毎時間、学習の終末には、学んだことを生かして今後のお話づくりのために、「お話のタネ」（がまくんって○○な人。かえるくんって…）を「お話ポケット」にためていく。単元の終末には、学習の中で自分がためてきた「タネ」をもとに、がまくんとかえるくんらしさがつまった、話を作っていく。

「お話ポケット」

次回にむけて

学習指導要領の「教科の目標」の解説に、「言語は、言語形式とそれによって表される言語内容とを併せ持っている」とあるように、言語活動においては形式と内容があって表現となることに留意しなくてはならない。

今回は、がまくんとかえるくんらしさという言語内容が学習の主とはなるものの、その言語内容を、アーノルド＝ローベルの書きぶり（会話を分けた書き方、「『〇〇』と言いました。」ではなく、「『〇〇』かえるくんは言いました。」という書き方など）に似せた言語形式に乗せて表現することも、表現の要素としては欠かせない。第三次で作品を読み合う際に、児童から「わあ！アーノルドさんのお話にそっくり！」という言葉が出ることを目指して言語活動に取り組ませたい。

講師：松永立志先生より

「言葉による見方・考え方を働かせる」

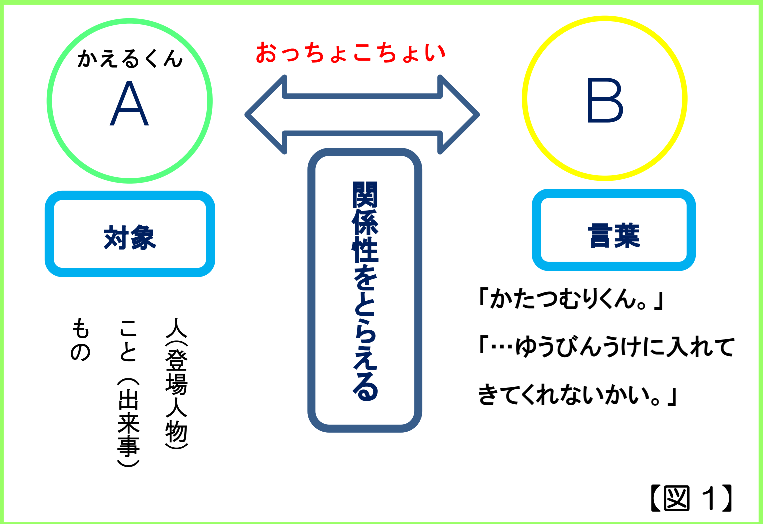
文学的な文章で、「言葉による見方・考え方を働かせて読んでいる子どもの姿」とは。

学習指導要領にあるように、国語科で言葉による見方・考え方を働かせるとは、言葉と言葉、対象（「人〈登場人物〉」「こと〈出来事〉」「もの」）と言葉の関係を、言葉の意味や働き等に着目して捉えたり、問い直したりして、言葉への自覚を高めることである。

登場人物の気持ちや性格を情景や会話文から想像する。

今回の「お手紙」の教材であるなら、「かえるくんらしさ」を見つける学習で、「かえるくんはおっちょこちょいだと思う。」と答えた子に対し、「なんでそう思うの？」と教師が問い直す。それに対して、「だってかたつむりくんに手紙を届けてもらうように頼んだから。」と叙述を根拠に答える。これは対象と言葉とをつなげている。【図１】

さらに、教師が「どうしてそれがおっちょこちょいなの？」と問うことで「だって大急ぎでがまくんにお手紙を渡したいのに、かたつむりくんに頼んでいるから…」というように、言葉と言葉との関係性も捉えさせることができる。



【図 1】

国語科授業づくり講座　　次回　１１月８日（金）13：４５～16：30　蓮池小学校